

濾過槽の体積: $60 \times 60 \times 60 \text{cm}^3$

実効濾過層: $48 \times 48 \times 13 \text{cm}^3$

貯水槽の体積: $1.8 \times 1.8 \times 1.8 \text{m}^3$

したがって受水装置から濾過槽に流入した放射能の推定量は、 ^{90}Sr について $85.36 \times 10^{-6} \text{mc}$ 、グロス・カウントについては 0.19mc である。また比放射能の測定結果から、濾過槽と貯水槽にある放射能の量は、試料採取日について約 $5.32 \times 10^{-3} \text{mc}$ の程度と考えられる。

この値は ^{90}Sr の流入推定量の約 60 倍であり、グロス・カウントから推定した流入量の約 $3/100$ であるが、さらに使用した水と共に移動した放射能の量や核実験日を考慮し、これらの値とハンター・パローの収率表との関係を求めることは興味ある問題であろう。これら調査結

果から濾過効果は認められるが、濾過後の水についてもかなり放射能があることがわかった。

むすび

この調査は、気象管署で使用している放射能測定装置の範囲で行ったものであり、この種の調査として不十分なものであるが、天水を自家浄水装置で精製している場合の参考になれば幸である。調査にあたって御指導をたまわった土井観測課長、御協力いただいた井田技官にお礼申し上げる。

文 献

- 1) 科学技術庁, 1957: 放射能測定法, 17-18. 23.
- 2) 気象庁, 1958: 日本における人工放射能観測の現状, 24-26.

【書 評】

「気象学ハンドブック」

社会が進むにつれて、人間環境のもとになる気象への関心が高まるのは当然である。とくに戦後における気象学の発展と普及には目をみはらせるものがある。しかし、その反面、気象災害が必ずしも軽減せず、むしろ、悪質化の傾向にさえあるのも見逃せない。こんど、気象庁の専門家からなる編集委員会が3年有余を費して編集した気象学ハンドブックは、このような社会の要望にこたえた、時宜を得たしかもかなり野心的な企画である。

この書を一覧するに、まず気象学と気象事業の歴史的発展よりときおこし、およそ気象に関連した「基礎および応用のすべて」が章をおって、適切かつ簡明にのべられていることに感心した。気象学に関連する分野がいかに広大であるかということに、改めて驚かされたというも過言ではない。第2, 3, 4章の単位、定数、物理学、化学、天文学、第22章から25章におよぶ気象表、常数表、数表をのぞき、その他の一章ごとが、気象学と気象事業のそれぞれのディスプリンに属するのだから、おそれ入るの他はない。なるほど、これだけ複雑多岐にわたる気象学全般をうかがい、それを活用するには、いままで出た書物では全く不十分であって、ここに、気象学ハンドブックの出現した意義がある。こころみに章を追うていくと、第一章、概説について、第五章以下が気象器械、気象観測、気象通報と天気図、理論気象、大気の構造、天気予報、物理気象、気象実験、化学気象、航空気象、農業気象、産業気象、小気候、水理気象、海洋気象、気象業言、気象統計、気候学となってい

る。それぞれの章に要を得た説明とともに、役に立つ公式や表が豊富に入っているから、「教科書」と「便覧」の効用をかねそなえたものである。とくに戦後に発展した分野の紹介に力が注がれているのは当然であるが、読者はこれによって気象学の最近の進歩を展望することもできる。

編集委員の多くは、私の親しい友人であるから、仲間ほめとお叱りをうけるかも知れないが、よくこれだけ立派なハンドブックを仕上げたものだというのが、私の卒直な感想である。

しかし、少しアラさがしをしておこう。ところどころに重複がある。(例、凝結核の表11・1と13・6、太陽常数、4章と8章など) やや古い表(例、自然放射性物質、11・6表など)、図の転例(23・9図、1087頁)、人名のよみ方の不統一(例、ホートン、ハウトン Houghton, チャーネー, テャーニー, Charney など)、人名その他欧文の誤植(例、Plank [Planck], Rorentz [Lorentz], ICAN などは少しひどい。欧文の誤植はこのほかにもたくさんある。) また行をあらためるときに欧語のきり方のでたらめ、説明のあやまり(例、視界の発光原因、その他) 生物の学名に主体活字を用いたことなど。このほかにもまだ多少の難点はあるが、いわば、これらはマイナー・ミスティブに属するもので、必ずしも全体のできばえを左右するものではあるまい。版を改めるとともにぜひ訂正をおねがいがしたい。

ともあれ、この書が、できるだけひろく活用され、社会の進歩と気象学の進展に貢献するよう望んでやまない。(三宅泰雄)